

Q & A

〔子宮奇形と不育症〕

Q 日産婦誌46巻12号に掲載された「子宮奇形と不育症」(前田, 長島両先生)で述べられた子宮奇形の分類について質問致します。

私は以前から成書の奇形の分類に疑問を感じておりましたが, 双角双頸子宮と分離重複子宮の違いもその一つです。先生方のお示しになった Jarcoo の分類における双角双頸子宮と分離重複子宮は, 図では腔中隔の有無のみが相違点のようにも見えますが, 何を基準に鑑別されるのでしょうか。また, Buttram & Gibbons の分類では, 双角双頸子宮というカテゴリーを設けず didelphys に包括していますが, この点に関する先生方のご意見をお聞きできれば幸いです。

(広島大学 上田 克憲)

A 子宮奇形の分類については, 以前からたくさんの報告があります。しかし残念なことに, いずれの分類型も学問的には理解できるのですが, 臨床的には各々の奇形の間に移行型が多く存在し, 実際の診療上では明瞭かつ明確に子宮奇形を型分類するのは困難な場合もあります。そのためか, 奇形分類の歴史的経緯をみても, 少しずつ簡略化されてきているようにも思えます。また, Jarcoo の分類(1946年)も原本では10種類以上に型分類されておりますが, 最近では研修コーナーに掲示したような簡略化された分類図が汎用されております。ご指摘のように, 図に一部不適切な箇所があったかもしれません。それは, 双角双頸子宮と分離重複子宮を極端に分類するならば, 子宮漿膜ならびに筋層の一部が共有されている状態のものが前者であり, 完全に分離しているものが後者であろうと考えるからです。そのため, 図中での腔中隔の有無はあまり意味がなく, 双角双頸子宮では頸部を明確に二つにすべきかもしれませんし, 分離重複子宮の図に関しては子宮体を完全に離して表示すべきであったかもしれません。またこの両者の鑑別は, 腔中隔の有無やその長さとは関係なく, 内診で二つの子宮体の各々が独立して別個の可動性を有している場合には分離重複子宮とし, 可動性に連動性をともなう場合には双角双頸子宮とすべきであろうと考えております。勿論, これらを確定診断するためには開腹ないしは腹腔鏡下に直視下に確認する必要があります。しかし臨床的にはともに子宮形成術の適応はなく, 両者をあえて鑑別する必要性は乏しく, その観点に限れば上田先生のご指摘のように Buttram & Gibbons 分類のほうが適格かもしれません。

最後に, 中隔子宮と双角単頸子宮の鑑別も臨床的には非常に困難な場合が多く, 不育症治療の立場からは子宮内腔の形態異常が最も重要であり, 従来の分類のように子宮奇形を細かく型分類する必要はないのかもしれません。いずれにしてもその診断は術前ならびに術中所見により主治医が総合判断するしかなく, やはり各施設が一定の診断・分類基準をもつことが肝要かと存じます。

(静岡県西部浜松医療センター産婦人科部長 前田 真)

(同医員 長島園子)

〔尿失禁とその治療薬〕

Q Vol. 47, No.1の「排尿障害の神経支配と chemical transmitter」を興味深く読ませていただきました。膀胱にはムスカリン受容体があり、アセチルコリンが作用して排尿筋の収縮を促すとのことですが、切迫性尿失禁に使用される抗コリン剤はどのように働いて、膀胱を弛緩させるのでしょうか。

また、抗コリン剤の投与方法と副作用をご教示下さい。

(東京、竹内正人)

A 膀胱平滑筋に存在するムスカリン受容体に対し副交感神経末端から放出されるアセチルコリンと競合的に作用して、膀胱平滑筋細胞膜でのアセチルコリンの作用を遮断するのが抗コリン剤です。塩酸プロピペリンは膀胱平滑筋直接作用があり、膀胱平滑筋の膜電位依存性カルシウムチャンネルに作用して、細胞内へのカルシウム流入を阻害し、膀胱平滑筋を弛緩させる作用も有しています。

不安定膀胱や神経因性膀胱などで無抑制膀胱収縮が生じている症例に対して抗コリン剤の投与は有効です。すなわち、頻尿、尿意切迫、尿失禁に対し有効な薬物といえます。

抗コリン剤としては塩酸オキシブチニンと塩酸プロピペリンがあります。投与方法としては塩酸オキシブチニンは6～9mg/日、分3で、塩酸プロピペリンは20mg/日、分1で1日最高投与量は40mgが一般的です。適応は神経因性膀胱、神経性頻尿、不安定膀胱、膀胱刺激状態（慢性膀胱炎など）などにもなる頻尿、尿失禁です。

副作用としては口渇と腹部膨満感などがあります。塩酸オキシブチニンの作用は塩酸プロピペリンより強いので、中・高齢婦人に投与する場合には塩酸プロピペリンをまず選択するのが適切でしょう。

(日本医科大学産婦人科助教授 進 純郎)

研修コーナーに会員皆様の声をお寄せ下さい。

「今月のテーマ」に対する質問や、テーマの要望、執筆者の推薦など何でも結構です。

また推薦図書や書評、エッセイなども歓迎いたします。下記の宛先にお送り下さい。

宛 先：〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町1-1

保健会館別館内

日本産科婦人科学会

研修コーナー編集 係